

前橋市立図書館コレクション展

2024 前期

会期 令和6年5月1日（水）～6月23日（日）

会場 図書館本館 2階展示室・1階中央図書室

前橋市立図書館
(群馬県前橋市大手町二丁目 12-9 / 027-224-4311)

第1章 地域の歴史

1. 酒井雅楽頭家関係資料

| 作品リスト No.1-2 |

「酒井家史料」は、前橋藩主であった酒井雅楽頭家の歴史とその藩政に関する基本史料で、明治 32(1899)年、当時東京大学助教授の三上参次、東京大学の学生で後に教授となった辻善之助らを中心に編さんが開始され、大正 2(1913)年に 14 年の歳月を要して完成しました。酒井家所蔵の膨大な古文書を厳密に調査し、その祖・広親から 24 代・忠邦までを年代順に記しています。編さんされた史料は 129 点にのぼり、昭和 58(1983)年に前橋市指定重要文化財に登録されました。この資料は、本館 2 階の郷土資料室で写本が閲覧できます。

「酒井雅楽頭書状」は、酒井雅楽頭家第 4 代・忠清から、松平大和守家第 2 代・直矩に宛てた書状です。文末に忠清の花押が記されています。忠清と直矩は懇意の間柄であったことが、直矩の日記「松平大和守日記」よりうかがえます。なお、松平大和守家は、後に酒井雅楽頭家に代わって前橋藩主を務めました。

2. 松平大和守家関係資料

| 作品リスト No.3-4 |

徳川氏の一門である松平家は全国各地にあります。前橋藩主となった松平家は徳川家康の第二子秀康（二代將軍秀忠の兄）の五男直基を祖とし、代々大和守を称する家系です。その藩政記録である「前橋藩松平大和守家記録」は、日々の政務、藩主や家臣の日常、城下の出来事などを藩の用番家老が交替で書き継いだもので、松平家が奥州白川に在城した元禄 11(1698)年から前橋で明治維新を迎えた後の明治 10(1877)年まで、実に 180 年の長きにわたる記録です。昭和 3(1928)年、当時の松平伯爵家に秘蔵されていたものを前橋市立図書館に移して補修と保存処理が行われたのち、昭和 34(1959)年に正式に前橋市へ譲渡されたことを受け、当館所蔵資料となりました。

内容は、御用日記・家中事寄・給帳・日帳などに渡り、そのうち前橋在城時代の記録が全 40 巻の『前橋藩松平家記録』として出版されています。江戸時代の前橋の実態を知ることができる大変貴重な史料で、平成 24(2012)年に群馬県指定重要文化財に登録されました。

「稲葉美濃守書状」は、稲葉美濃守（稲葉正則。相模国小田原藩第 2 代藩主）より松平大和守（直矩）および松平石見守（松平定長。伊予国松山藩第 3 代藩主）に宛てた書状です。日付のみ記されていますが、「松平大和守日記」寛文 3(1663)年 4 月 17 日の記事にこの文面が転載されています。寛文 3 年は、直矩が越後国村上藩主であった時代です。書状の内容としては、4 代將軍家綱が日光へ無事到着した旨を知らせるものであり、家綱はこの日に日光社参（家康の命日 4 月 17 日に將軍家が日光東照宮に参拝する行事）を行っていました。なお、この書状を受領した直矩が美濃守のもとへ挨拶に向かったことも「松平大和守日記」に書き残されています。

3. 幕末の前橋藩

| 作品リスト No.5-10 |

●前橋藩の西洋砲術^{*1}

文久元(1861)年12月、松平大和守家を相続した直克^{*2}は、藩の近代軍制の整備に着手しました。その動きの中で慶応元(1865)年、西洋法大砲組4組が設置されます。これにより、歩兵層が従来使用していた火縄銃に替わって、西洋砲および西洋銃が採用されることになりました。さらに翌年には、西洋流の砲術である高島流が、それまでの荻野流(和流)に替わり、軍制上正式に採用されました。

高島流とは、幕末の砲術家・高島秋帆^{*3}の考案した西洋砲術をいいます。高島は、長崎港の防備を担当した関係から出島のオランダ人に砲術を学び、高島流砲術を完成させました。天保11(1840)年のアヘン戦争以降幕府はこの砲術を採用、以後諸藩がひろく採り入れるようになり、前橋藩でも弘化4(1848)年頃から導入されています。

高島家文書の「知行宛行状^{*4}」は、直克より家臣・平松彦兵衛への宛行状です。平松家は三河国(現愛知県東部)出身で、代々彦兵衛を名乗り、物頭や大目付などを務めました。この宛行状の「彦兵衛」は、旗奉行や物頭に取り立てられ、上述の西洋法大砲組設置の際には、その組長のひとりに就任しています。

木村家文書「免許状」は、江川太郎左衛門^{*5}より松平家家臣・木村栄吉に宛てた、高島流砲術の免許状です。木村は嘉永6(1853)年より慶応3(1867)年10月まで、江川のもとで砲術や築城を学びました。また、それと並行して慶応元年より同4(1868)年12月まで、前橋藩内において高島流砲術の師範代を務めています。

野口家文書「高島流用留」は、安政4(1857)年から文久3(1863)年までの砲術実施日記です。署名は「野口士」となっており、個人名は不明ですが、野口庄司という人物が安政4年より砲術訓練を命じられたことが白井宣左衛門の記録^{*6}に記されています。

*1 砲術：鉄砲や大砲を操作する技術。

*2 松平直克：第11代川越藩主(慶応3(1867)年1月28日より前橋藩主)。天保11(1840)～明治30(1897)年。家督相続後、藩財政の立て直し、内海警備、兵制改革を実行。前橋城を再築し、慶応3年、約100年ぶりに前橋藩が復活するが大政奉還となる。戊辰戦争期には徳川慶喜に朝廷への恭順を進言し、一方朝廷に対しては徳川家の存続を願い出るなど、譜代大名として公武の間を斡旋した。

*3 高島秋帆：寛政10(1798)～慶応2(1866)年。長崎町年寄の家に生まれ、父の跡を継ぎ、後に長崎会所調役頭取となる。

*4 宛行状：武家が家臣に土地または年貢などの知行を給与する時に出す文書(『日本国語大辞典』)。

*5 江川太郎左衛門：江川家は代々太郎左衛門を名乗り、伊豆国韮山(現静岡県伊豆の国市)の代官を務めていた。第36代^{ひでたつ}の英竜は、享和元(1801)～安政2(1855)年。天保6(1835)年に父の跡を継ぎ、幕命として高島秋帆に弟子入り、その後江戸で高島流を教授した。門下に木戸孝允、橋本左内らがいた。

*6 白井宣左衛門：文化8(1811)～慶応3(1867)年。松平家家臣。安政4(1857)年、前橋町在町奉行兼勘定奉行に就任した。慶応3年、房州(現千葉県南部)富津の町在奉行兼勘定奉行となるが、官軍から前橋藩の尊王の態度に疑いをかけられ、それを晴らすため自刃した。前橋町在奉行時代の記録「心覚」および「公私箇条留」には、幕末の前橋の重要事項などが記されている。

●戊辰戦争期の前橋藩

戊辰戦争（慶応4(1868)年1月3日の鳥羽・伏見の戦いから、明治2(1869)年5月18日の箱館戦争終結までの、官軍と旧幕府軍との戦争）と前橋藩との関わりがうかがえる史料を展示しました。

横地家文書「御用日記帳」の展示箇所には、慶応4年3月10日、東山道総督府^{*7}より松平大和守らに発された通達が記録されています。これによると、旧幕府軍の脱走兵は、前日9日の梁田戦争^{*8}に敗走し、同地はひとまず鎮定したが、残党についてはもれなく捕らえるよう周辺の藩主に命じていることが分かります。横地家は、前橋向町（現在の住吉町一丁目および平和町一・二丁目）の名主家で、弘化・嘉永頃から明治初期までの「御用日記」が残されており、幕末から明治初年の前橋の歴史を知ることのできる史料のひとつとなっています。

野口家文書「三国合戦従軍日記」は、松平家家臣・野口庄司による、慶応4年4～6月の三国戦争^{*9}・戸倉戦争^{*10}の従軍日記です。官軍に招集された前橋藩兵は、木村栄吉を指令官としてこれらの戦に参加しました。閏4月24日の三国戦争総攻撃の際、前橋藩兵は官軍の主力となって攻撃を行い、八木始^{はじめ}^{*11}が敵将弟の町野久吉^{しやまきゅう}の首級を挙げるなどしています。展示品は5月21日の戸倉戦争に関する記述で、会津兵の急襲を受けた官軍の様子が記されています。なお、この三国・戸倉戦争の後、木村および八木は官軍より五線銃を賜わっています。

木村家文書「人足触^{*12}」は、慶応4年5月13日、東山道総督府執事より大音龍太郎^{おおと}^{*13}（巡察使）、木村栄吉（前橋藩）、小原麻二郎^{*14}（吉井藩）らに宛てられた触状です。引戸駕^{ひきどかご}（出入口にすだれの代わりに引戸をつけた駕籠）と宿駕^{しゆくかご}（宿駅に備えた粗製の駕籠）、およびそれに伴う人足を出すよう命じています。日付は戸倉戦争のさなかで、前橋藩兵は木村の指揮のもと土井に駐屯していました。包には「前橋藩江」とあります。

*7 東山道総督府：東山道鎮撫総督。慶応4(1868)年1月9日、江戸総攻撃を目的として東海道・北陸道とならび設置された討幕派の軍で、総督には岩倉具定（具視の次男）、副総督に岩倉具経（具視の三男）が任命された。同2月9日、3つの鎮撫総督の統轄官として東征大総督（総督は有栖川宮熾仁親王）が新設されると、鎮撫総督は先鋒総督兼鎮撫使と名を変え、東山道軍では参謀として新たに乾退助（板垣退助）、伊地知正治が就任した。

*8 梁田戦争：慶応4年3月9日、鳥羽・伏見の戦いに敗れた旧幕第11・12連隊を脱走した兵と、東山道軍の斥候隊が梁田（下野国足利郡梁田。現栃木県足利市）で衝突した戦い。急襲に成功した東山道軍が勝利を収めた。

*9 三国戦争：慶応4年閏4月、官軍と会津兵が上越国境の三国峠付近で衝突した戦い。会津・長岡藩を中心とした奥羽・北越諸藩の兵と旧幕府軍の一部が、三国峠を越えて沼田方面に出没、これを警戒した官軍は、巡察使の豊永寛一郎・原保太郎の指揮により前橋・沼田・高崎など上野諸藩の藩兵らを率いて進撃を開始した。24日、両軍は三国峠下の般若塚で衝突。包囲作戦をとった官軍が勝利した。

*10 戸倉戦争：慶応4年5月、官軍と会津兵が利根郡戸倉（現片品村）で衝突した戦い。三国戦争後、官軍はただちに戸倉方面へ転進、5月9日、前進基地である土井村（現片品村）の大円寺に全軍が集結した。指揮官は大音龍太郎・豊永寛一郎・原保太郎・新田満次郎らであった。同21日、会津兵が戸倉の官軍守備兵を急襲、守備兵は一旦退却し、主力がただちに出兵したが、会津兵はすでに撤兵した後であった。

*11 八木始：弘化元(1844)～大正10(1921)年。八木家は代々松平家の家臣で、延宝7(1679)年、姫路において召し出された。三国戦争の折、始は半隊司令官として木村栄吉とともに前橋藩兵を率い、24日の総攻撃では、前日帰藩していた木村に代わって藩兵の総司令官を務めた。維新後は、勝山源三郎とともに県下初の学区取締に任命され、厩橋学校の創設にあたった。そのほか、県職員や東群馬郡・南勢多郡・邑楽郡の郡長などを務め、明治35(1902)年からは松平家邸内に住み込み、家令として仕えた。萩原朔太郎の母方の祖父にあたる。

*12 触状：連名の宛名で回覧する文書（『日本国語大辞典』）。

*13 大音龍太郎：天保11(1840)～大正元(1912)年。近江国彦根藩（現滋賀県）出身。岩倉具視の知遇を得て慶応4年4月に上野国巡察使となり、小栗上野介の処刑や三国・戸倉戦争の指揮などを行う。同6月、岩倉県創設に伴い、初代知県事に任命されるも半年ほどで罷免となった。

*14 小原麻二郎：慶応2、3年頃の記録では御用人格を務めていた。

第2章 地域の人物

1. 作曲家 いのうえたけし 井上武士

| 作品リスト No.11-18 |

音楽教育家・作曲家。1894(明治27)年8月6日、勢多郡芳賀村五代(現在の前橋市五代町)生まれ。芳賀尋常小学校を経て、群馬県師範学校在学中に音楽を志すも、兄達に猛反対され、卒業後は上川淵尋常小学校の教諭になります。しかし音楽への思いは強く、勤務の傍ら受験勉強に励み、東京音楽学校甲種師範科(現在の東京芸術大学音楽学部)に合格し、入学します。同校を首席で卒業後は、東京高等師範学校や東京芸術大学など、様々な学校で教鞭をとりました。

大正、昭和初期の一般的な音楽教師とは異なり、楽譜どおりにオルガンやピアノを弾いて教えたことが特徴的です。横浜市音楽科指導員時代には、音楽教育振興にまず各校にピアノ1台が必要であると考え、横浜市内全ての学校にピアノを設置することを市長に進言し、実現させました。

童謡や唱歌の創作、普及にも力を注ぎ、「将来、大人になったときのこころの支えとなるような子供のための美しい音楽」を信条として『うみ』『チューリップ』『こいのぼり』などの童謡や唱歌、校歌など280曲を超える作品を残しています。音楽の教材である唱歌は、できる限り豊かな芸術性の溢れる曲にしようという思いのもとに作曲されました。

当時使用されていた教科書の編さん委員を務めたほか、晩年は日本教育音楽協会会長、全日本児童音楽家連盟会長などを務め、80歳で死去するまで音楽教育界の中心人物として活躍しました。著書は、音楽の基本を子供に向けて解説した『音楽のはなし』、西洋音楽の歴史をわかりやすく説明した『音楽歴史ものがたり』のほか、『音楽教育法』や『音楽教育読本』のような音楽教育に関するものが多数あります。

2. 画家 かわすみみちのすけ 川隅路之助

| 作品リスト No.19 |

洋画家。前橋市生まれ。旧制前橋商業学校(現・群馬県立前橋商業高校)を卒業後に上京し、富山房出版社に入社して本郷絵画研究所(美術家の養成機関)で絵画を学びます。裕伊之助や辻永に師事、デッサンや油絵の指導を受けながら数多くの公募展に出品しました。その間に反アカデミズムと在野展への志向が強くなり、春陽会展を目指すようになります。昭和14(1939)年に富山房を退社後、終戦まで神田電機学校(現在の東京電機大学の前身)の教員を勤めました。第二次世界大戦中の強制疎開で東京から前橋へ戻ると、終戦後まもなく前橋の亀升屋洋品店で横堀角次郎・南城一夫・中村節也・清水刀根とともに洋画五人展を開催。昭和26(1951)年には群馬県美術家連盟を結成し、連盟展を創立するなどして活躍しました。団体や展覧会の良い成長を願うなら、構成員が常に変わらない誠意と愛情を持たなければならないという考えのもと、連盟や連盟展に尽力しました。その後、16年間前橋市立工業短期大学(現・前橋工科大学)で学生に建築デッサンの指導を行い、その職を辞した後も公募展への出品や個展の開催など、精力的に活動を続けました。

3. 画家 島岡 實^{みのる}

| 作品リスト No.20 |

洋画家。大正 8(1919)年前橋市生まれ。繊細な色彩によって描かれる穏健な風景や静物画で知られています。旧制前橋中学を卒業後、昭和 16(1941)年光風会展^{こうふうかい}に入選。昭和 19(1944)年帝国美術学校（現在の武蔵野美術大学）西洋画科を卒業。昭和 22(1947)年二科展に初入選、翌年、第二紀会展に出品して二紀賞を受賞、同人に推薦されました。昭和 24(1949)年第 3 回第二紀会展に『燈灯』等を出品し同人優賞を受賞するとともに初の個展を開催。昭和 26(1951)年第 5 回二紀展に『お勝手』等を出品、同人賞を受賞、審査員となりました。一方、二紀展以外でも昭和 28(1953)年から昭和 37(1962)年までの日本国際美術展、昭和 29(1954)年から昭和 38(1963)年までの現代日本美術展（いずれも招待出品）に出品しました。

4. 画家 南城一夫^{なんじょうかずお}

| 作品リスト No.21 |

洋画家。明治 33(1900)年、前橋市一毛町（現在の城東町）生まれ。旧制前橋中学に入学。同期に洋画家の横堀^{よこぼり}角次郎、詩人の萩原恭次郎がいました。卒業後上京し、岡田三郎助主宰の本郷洋画研究所で学び、のち東京美術学校（現在の東京藝術大学）西洋画科に入学します。在学中に岡鹿之助と共に渡仏。滞仏中のまま東京美術学校を卒業、パリでロジエ・ビッシエール・アンドレ・ロートに師事しました。12 年間にわたる滞仏中に、サロン・ドートヌヌ・アンデパンダン展などに出品。第二次世界大戦の接近で、昭和 12(1937)年やむなく帰国。帰国後は前橋に定住。1950 年代には、春陽会展^{しゅんやうかい}をはじめとして日本国際美術展、現代日本美術展、朝日秀作美術展などに出品し、県美術展にも、創立時より審査員として参加しています。昭和 56(1981)年秋、県立近代美術館で回顧展が行われ、県民にも広く知られるようになりました。

作風は、花や小動物などの身近なモチーフが多く、作者のあふれる愛情が、色彩と造形の確かさに支えられて豊かな詩情をたたえています。代表作には『鯛の静物』、『黎明の鶏』、『雨のまんじゅしゃげ』、『描く人』などがあり、前橋市民文化会館（現在の昌賢学園まえばしホール）大ホールどん帳の原画『うさぎ野』も制作しています。

5. 書家 岡庭征人^{おかにわゆきひと}

| 作品リスト No.22-23 |

書家。号・呑石^{どんせき}。昭和 19(1944)年、吾妻郡中之条町生まれ。群馬県立前橋高校から東京教育大学芸術学群書専攻（現・筑波大学）に進み、書を学びます。卒業後は群馬に戻り、県内公立高校・群馬大学・創造学園大学等で書を指導、同時に書作家として制作活動を行いました。作品は、個展のほか、他ジャンルの作家との二人展などで発表。コラボした作家には、井田淳一（洋画家）、田村吉康（漫画家）、吉田章二（洋画家）、椋澤健治（陶芸家）、吉田光正（彫刻家）らがいます。

また、群馬県展書道の部審査員、現代臨書展審査員などを務め、呑石書法研究会を主宰し、会員とともに展示会を開催するなど、精力的に活動を行っていました。著書に『書写概論』、作品集に『書・岡庭征人』などがあります。

展示の資料は、令和 4(2022)年度にご遺族より寄贈いただきました。

第3章 時代を越えて受け継がれる和装書

| 作品リスト No.24-29 |

当館では、およそ 6,500 冊の和装書を所蔵しています。当館のコレクションは、大正 5 (1916) 年の開館時に上野教育会付属図書館 (明治 33 年設立) の収蔵品を継承したことから始まりました。コレクション形成の流れは図書館の歴史と共に、長い年月の中で形を変えながら現在まで受け継がれています。

今回のコレクション展では、数多くの和装書の中から数点を厳選してご紹介します。普段は書庫に収蔵されており、ご覧いただく機会の少ない資料です。現代とは違った雰囲気や纏う書物の深みをお楽しみください。

『**仮名読八犬伝**』…嘉永 4(1851)年に発行された、「南総里見八犬伝」を平仮名化し、挿絵入りの小冊子である草双紙にしたものです。江戸時代後期に戯作者として活躍した為永春水が抄録、画を歌川国芳が担当しています。当館では 7-9 編と 13・15 編の 2 冊を所蔵しています。「南総里見八犬伝」は、江戸時代の戯作者・曲亭馬琴による、房総を舞台にした全 106 冊からなる長編小説です。展示の箇所は、八犬士の 1 人である犬坂毛野いぬさかほのが田楽の踊り手・旦あさけの開野として舞を披露している場面です。

『**俳句寿互録**』…昭和 18(1943)年の元日に発行されたすごろくです、1 マスに俳句または川柳が 1 句ずつ書かれ、絵が添えられています。風景や花などのほか、戦時中の世相を反映するような爆弾の絵や戦の文字などを記したマスもみられます。

『**七拾壱番歌合**』…明治 27(1894)年に翻刻された、職人による歌合の資料です。歌合とは、左右に分かれて歌を詠み審議で優劣を決める催し物のことで、この資料では月と恋の 2 題で 1 人 2 首の歌を詠んでいます。鍛冶、相撲取り、陰陽師、心太売りなど 142 の職業人の歌が収録されています。和歌のあとに審判が作品の優劣を判定して述べる判詞が書かれており、隣に職人の口上と絵が添えられています。

『**千載和歌集**』…後白河天皇の命令により、藤原定家の父である藤原俊成が歌を選び集めた勅撰和歌集です。俊成編の『三五代集』をもとにして作られており、女性や僧侶による自分の感情を詠んだ抒情歌が多く集録されています。有名な古歌の言葉を取り入れて新しく歌を作る「本歌取り」と呼ばれる手法が多く使われており、言葉ではっきり表現せずに心情を歌った「幽玄」と呼ばれる調べは後の文学に影響を与えました。『千載和歌集』という書名は、千年の後までもこの集が伝わることを願ってつけられています。

『**万葉集**』…現存する最古の歌集で、7~8 世紀に作られた歌が収められています。今回は、宝永 6 (1709)年に出版された資料を展示します。皇族から一般民衆まで約 500 人の歌が収められており、恋慕や親愛の情を歌い親しい間柄で贈答された相聞歌、死者を弔う挽歌、旅や自然、宮廷の儀式などを歌った雑歌の 3 種類に大きく分類されます。展示している箇所は上野国を題材にした相聞歌で、伊香保、多胡の地名が見られます。

『**永花百人一首文十抄**』…天保 14(1843)年に再刻された和古書です。小倉百人一首の歌に絵が添えられています。展示している箇所では、和泉式部と紫式部の和歌が記載されています。和泉式部の和歌では、きっともうすぐ死んでしまうからこの世の思い出にもう一度あの方に会いたいという思いを、紫式部の和歌では、久しぶりに会えたのに雲隠れするようにすぐ帰ってしまった友人への思いを歌っています。

1 階中央図書室展示品

1. ふくざわいちろう 福沢一郎 《ケンタウロス》

| 作品リスト No.30 |

洋画家。富岡町（現・富岡市）生まれ。東京帝国大学文学部に入学後、彫刻家朝倉文夫に入門。大正 11(1922)年 第 4 帝展彫刻部に入選し、彫刻家として活動を始めます。フランスへ渡った際にシャガールやルーベンスの画風に興味を持ち超現実主義風の作品を描くようになり、7 年間でさまざまな画風を吸収したことがその後に描く絵画の基礎を築きました。また、フランス滞在中の昭和 5(1930)年には独立美術協会の結成に参加し、退会するまでの間日本の美術界に大きな影響を与えました。日本帰国後、戦時中に共産主義者の嫌疑をかけられて半年ほど連行留置されますが、戦後にはモニュメンタルな人間群像を描き、それについて「戦後の混乱期が、最も精彩があったように思う。」と語っています。国内や海外を巡りさまざまな作品を発表し続け、美術文化協会への尽力や多摩美術大学の教授として活躍しました。神話や地獄、歴史をテーマに思想と主題を盛り込む絵画スタイルで多くの作品を生み出しています。

「ケンタウロス」は、図書館が自由な学びの場であることの象徴として、現在の本館開館当時の昭和 49(1974)年から中央図書室 1 階と 2 階の吹き抜けに面した壁に常設展示されています。深い青空の色と黄緑の鮮やかな大地を背景に、ピンク色のケンタロスが大きく腕を広げ飛び跳ねるようなポーズをとっています。後ろでは牧師が踊り、底抜けに明るい世界を楽しみ、生命を謳歌しているようです。この作品は昭和 46(1971)年に群馬銀行から前橋市へ寄贈されました。

2. かわすみちのすけ 川隅路之助 《春野》

| 作品リスト No.31 |

詳細は第 2 章「2. 画家 川隅路之助」をご覧ください。

3. もぎこういち 茂木紘一 《前橋駅前風景》

| 作品リスト No.32 |

画家。昭和 17(1942)年、前橋市生まれ。前橋市立図書館近くの長屋で育ち、群馬県立前橋高校を卒業後の昭和 45(1970)年に創元展で初めて入選すると翌年には船岡賞を受賞、昭和 55(1980)年まで出品を続けました。昭和 48(1973)年には日展で初入選を果たし、前橋市民展でも市制施行 80 周年記念賞を受賞しています。そのほかにも日仏現代美術展や昭和会展など、さまざまな公募展に精力的に出品し、多くの賞を受賞しました。

展示品の「前橋駅前風景」は、JR 前橋駅の旧駅舎がモチーフで、ケヤキ並木など当時の駅舎の様子と駅周辺の風景が描かれています。この作品は現在の図書館本館が開館した直後に画家本人から寄贈されました。令和 3(2021)年に市民活動により絵画の修復作業と額装が施され、新たな装いで図書館に展示されています。

4. ^{たかたひろあつ}高田博厚《萩原朔太郎像》

| 作品リスト No.33 |

彫刻家、随筆家。明治 33(1900)年、石川県鹿島郡矢田郷村（現・七尾市岩屋町）生まれ。生まれて間もなく福井県福井市へ移り、福井県立福井中学校（現・福井県立藤島高校）へ進みます。小学生の頃から絵を多く描いていて、中学生の頃には同じ中学の生徒と卒業生数名で合同展覧会を開催します。この時、共に展覧会を開催したうちの一人、雨田光平の粘土細工で初めて彫刻に触れました。高田は自身について、学校の勉強はしなかったが英語が図抜けて得意で、中学生の頃にシェイクスピアを原文で読み、ゲーテやトルストイ、ドストエフスキーに夢中になっていたことを語っています。大正 7(1918)年に上京して高村光太郎と出会い、共に図画展へ出品してから、2 人は生涯にわたって交友関係を保ちました。昭和 6(1931)年にはフランスへ渡り、作家のロマン・ロランや作家で詩人のマルセル・マルティネなど多くの文化人と交流をもち、日刊新聞「日仏通信」を発行、第二次世界大戦後には毎日新聞特派員も務めました。その後昭和 32(1957)年に帰国、東京や鎌倉にアトリエを建設して作品制作を行い、彫刻家だけでなく随筆家としても活躍しました。前橋市出身の詩人・高橋元吉との親交もあり、彼の追悼会も兼ねた昭和 40(1965)年の朔太郎忌では、「回想の詩人高橋元吉」という講演を行っています。

5. 旧利根橋橋門装飾のレリーフ

| 作品リスト No.34 |

利根橋は明治 34(1901)年、近代的鉄橋として一新されました。そのとき双方の橋門に飾られたのが、群馬と前橋の旧名・厩橋の飛躍と発展を象徴したこの鉄造レリーフです。アメリカ・カーネギーカンパニー制作のこのレリーフは、菱形 4 面の形態で「馬の群れ」をあらわしています。昭和 38(1963)年の旧橋解体の際に前橋市が県より譲り受けて保存していましたが、前橋市の市制 80 周年記念事業として前橋市立図書館を新築する際に移管され、往時をしのぶ品としてその姿を現在に残しています。

参考文献

- 亀岡泰辰「明治戊辰上州の戦闘及び予の初陣」『上毛及上毛人 第150号』 1929年
『教育音楽 中学版 第10巻第8号』 日本教育音楽協会／編 1966年
『前橋市史 第二巻』 前橋市史編さん委員会／編 1973年
『前橋市史 第三巻』 前橋市史編さん委員会／編 1975年
『前橋市史 第四巻』 前橋市史編さん委員会／編 1978年
『群馬県百科事典』 上毛新聞社 1979年
『自伝抄VII』 高田博厚／ほか著 1979年
『戊辰役戦史 上巻』 大山柏／著 1979年
『上毛新聞』 1980年2月13日 朝刊
『群馬県人名大事典』 上毛新聞社／編 1982年
『明るい行政 10月号』 群馬県 1982年
『群馬県史 資料編 22』 群馬県史編さん委員会／編 1983年
『前橋市史 第五巻』 前橋市史編さん委員会／編 1984年
『前橋事典』 前橋事典編集委員会／編 1984年
『前橋市史 第六巻』 前橋市史編さん委員会／編 1985年
大竹茂雄「群馬における明治時代初期の数学教師」『群馬文化 第212号』 1987年
『新・まえばし風土記』 加藤鶴男／著 1987年
『前橋の芸術文化のあゆみ』 前橋市の芸術文化のあゆみ編集委員会／編 1990年
『井上武士の生涯研究』 塚本靖彦・斎藤博／著 1990年
『井上武士の全業績と目録作成』 塚本靖彦／著 1993年
『広報まえばし 第1032号』 1994年
『前橋史帖』 中島明／著 1997年
『川隅路之助生誕100年記念展画集』 川隅路之助生誕100年記念展実行委員会／編 2006年
『前橋藩松平家記録 第40巻』 前橋市立図書館／編 2007年
『群馬新百科事典』 上毛新聞社 2008年
『美術家人名事典 建築彫刻篇』 日外アソシエーツ 2011年
『結城松平家と家臣団』 稲葉朝成／編 2015年
「履歴書 熊谷県貫属前橋住士族八木始」 群馬県立文書館所蔵「八木健次家文書」
<https://www.pref.gunma.jp/uploaded/attachment/147185.pdf> (2024年1月18日閲覧)